

祭礼行事に見る模擬婚姻儀礼について — 研究ノートから —

東 條 寛

はじめに

近畿地方及びその周辺の祭礼行事の中で、実際の儀礼がトウヤを中心として行われる事例は非常に多い。これらの中ではトウヤが成人男性ではなく、その妻や家族も関わった形で行われる事例もいくつかある。本稿ではその中でも婚姻儀礼に類する事例についていくつか紹介しておきたい。

(一) 三重県熊野市二木島町「二木島祭」の事例

三重県熊野市二木島町「二木島祭」は、三重県の無形民俗文化財に指定されている祭礼であり、紀伊半島南部にいくつか分布する船を使用する「御船祭」に属する形態の祭礼である。この祭礼は二木島町の室古神社と阿児師神社の祭礼として、現在では十一月三日に行われている。祭礼行事の儀礼の中心となるのは、集落を輪番に回ってくる成人男子の勤めるトウヤ（シヨウドと称する）であり、祭礼の行われる半年前から、毎日、朝夕の二度浜に出て潮垢離をとり、その間は髪・髭は伸び放題で首に数珠をかけた姿である。もともと祭礼は、現在の十一月三日以外に五月五日にも行われており、それぞれの祭礼にトウヤが選ばれていた。現在では十一月の祭礼に室古神社、阿児師神社の二組のトウヤが参加す

る。ここで、注意しなければならないのは宵宮、本日の儀礼の中では、トウヤ単独でその儀礼に参加するのではなく、一〇才前後の少女の務めるガズ、ガズより年少の少女の務めるガズトモ、ガズ等の面倒をみるガズツキ、七〜八才前後の少年の務めるオドリコ、青年の務めるサカイキハヤシの神役が登場することである。

宵宮ではトウヤの座敷で二組の前述の神役が集まり、神官の祝詞の後に、掛魚を切りわけられ、三献の杯を行う。この場面ではガズトモは丸鬘姿（現在は鬘を使用する）となる。こののち、イケヤジ船の宿に一行は向かう。祭礼の当日は、トウヤは麻袖広の大紋、冠に帯刀した姿で、ガズ等の神役と三献の儀の後、関船に乗り込む。関船は出立ちの唄を三回歌った後に、室古神社に向かう。室古神社では拝殿での神事後、広庭の儀と称して正面にトウニン以下の神役が着座し、五献が行われ、宵宮の時と同様に掛魚を切りつけて各役に配る。この時、トウヤの服装は前述のとおりであるが、ガズツキは黒い着物に丸鬘、ガズ、ガズトモは白い綿帽子を頭に被った姿であり、オドリコ、サカイキハヤシは通常の着物を着ている。この後、トウヤ以下の神役は再び関船に乗り、阿児師神社に向かい阿児師神社でも同様の儀礼を行った後に、関船に乗船して港に帰り、祭礼は終了する。阿児師神社から港に帰る時には、オドリコ

はそれまでの和服姿から赤の着物に頭巾を着け、手に采を持って踊る。また、帰る二隻の関船は競争することになり、船が着岸する前になると、トウヤでの儀礼を取り仕切るババ（男性の老人が務める）が手にシヤモジと杖を持ち、頭に赤い布を被つてしきりに船を招く所作を行うこととなる。

祭礼の次第は概略以上のとおりであるが、この事例で注目しなければならぬのは、既にその役割が明確になっていないトウヤ以外の神役の存在であり、特にトウヤの世話をするサカイキハヤシ、あるいは帰りの関船の舳先で踊る役割を持つオドリコ以外の神役―すなわちガス、ガズトモ、ガズツキという名称を持つ女兒ないし女性が務める神役の存在である。これらの女性は宵宮にしる本日にしろ、トウヤと同席しかつその儀礼に参加する重要な存在でありながら、その宗教的な意義付けが現行の儀礼では極めて曖昧になっている。トウヤ自身は神聖な役を務めるために、毎日、朝夕の二度浜に出て潮垢離をとり、その間は髪・髭は伸び放題にすることを要求されている。厳格な精進潔斎が要求されるという点では、近畿地方の宮座のトウヤ儀礼と共通するものであり、神役を務めるにふさわしい存在となっている。しかし、ガス、ガズトモ、ガズツキについては、そのような厳格な精進潔斎を要求されることはなく、宵宮と当日の儀礼に出席することだけとなっているのである。ここで、注目したいのはガス、ガズトモ、ガズツキの儀礼の場における装束である。すなわち、ガズツキが女性の正装である丸髷に黒い着物を着することは、祭礼の重要な儀礼に参加する者として、その役割が明確でなくともある意味で当然であると解釈できる。しかし、女兒の務めるガス、ガズトモ



二木島祭りのショウド、ガス、ガズトモ、ガズツキ、オドリコ

の両人がいずれも儀礼の場で白い綿帽子を被ることに、そのような神事に参加する者としての必然性がない。むしろ、そのような消極的な意義ではなく、積極的な意義付け—すなわち白い綿帽子を被ること自身に、ガズ、ガズトモが神事に参加することの意義を見いだす必要があるように思える。

そこで、その扮装について考えてみると、一般的に白い綿帽子は江戸時代以降には一般的な花嫁の衣装であるということに気が付く。そして、ガズとガズトモという関係自身、伝統的な婚姻の民俗事例に見られる花嫁と連れ嫁の関係と類似している。すなわち、現在の神事儀礼の中ではもはや明確ではないが、トウヤとガズ、ガズトモの存在は、もとは婚姻を模した儀礼であった可能性が高いことを示している。もちろん、現在ではその意味は既に忘れられており、ガズやガズトモは少女となり、その衣装にのみこの儀礼が本来婚姻儀礼を模したものであることを示す断片的な儀礼となってしまう。しかしその断片から考えるとこれらの儀礼が本来婚姻を模した儀礼—模擬婚姻儀礼であったのではないだろうか。こうしたトウヤ儀礼に見る模擬婚姻儀礼が果して二木島祭りのみ見られる特殊な事例であるのかどうか、更にいくつかの事例を見て考えることとしたい。

(二) 和歌山県東牟婁郡古座町「河内祭」の事例

和歌山県東牟婁郡古座町の河内祭は、重要民俗文化財に指定された祭礼であり、先の事例と同様、紀伊半島南部にいくつか分布する船を使用する「御船祭」に属する形態の祭礼である。現在の祭礼は七月二四日から二六日にかけて行われる。祭礼に参加するのは古座、高池下部、古田、

宇津木、月野瀬の五地区であるが、中心となるのは古座である。古座には勇進会と称する一種の漁師の若者組があり、彼らが中心になって三隻の御船を運行している。祭礼全体は重層的で複雑な構成になっているが、儀礼の中で特に重要視されている役にシヨウロウがある。

シヨウロウは一〇才前後の男児二名と女兒一名でもとは七才の者が務めたという。これらのシヨウロウは古座に住む者の希望者から選ばれる。その他の地区でも河内祭のトウヤがそれぞれ選ばれるが、シヨウロウに相当するような子供がその儀礼に登場することはない。

さて、祭礼行事は七月二三日夕方にシヨウロウの一行が神社に行き、二五日まで忌籠りすることから始まる。かつては神社から学校にも通ったという。晩になると古座の町方が務める古座獅子が宮入りをする。二五日には早朝から御船・当船・獅子伝馬の飾り付けを行い、古座川上流にある河内様前の河原に幟を立てて、五ヶ区の座をしつらえシヨウロウ屋台を組んで準備する。午後になると神社で神事が行われ、「河内大明神」の神額を三隻の御船に乗せて御船の出発となる。岸を離れた三隻の御船は、一端河口から海上に出て左回りに旋回して再び古座川を遡上する。これらの船の運行に際しては、それぞれ決められた「御船唄」が歌われる。途中で四箇所の橋の下を潜るが、その時には橋の手前で着岸して「神額」を一端陸上にあげて、船が橋を通過すると再び船を着岸させて「神額」を船に乗せるということを繰り返す。夕方、古座川の上流に位置する河内様に到着する。河内様というのは古座川の中にある小さな島でこの小島全体が御神体ということになっている。一旦、河内様に到着すると島の頂上の一枚岩に荒潮と御神酒を三回かけて、対岸の河原に着岸

して夜籠りする。神社では宵宮の神事が行われるが、特別なことはない。ほぼ同時刻に、河内様の方では三隻の御船がゆっくりと河内様のまわりを三周し、再び河原に着岸して夜明けを待つ。途中、古田の獅子舞が河原にねりこんで帰る。

二六日が本祭で神社で奉告祭が行われる。これがすむと先のシヨウロウが土を踏まぬように若者に背負われて当船に乗る。当船では舳先に女子のシヨウロウを真ん中に両側に男子のシヨウロウが座って出発する。この当船を先頭に獅子舞の乗った獅子伝馬、權伝馬が後ろに続く。シヨウロウは前日の神額と同様橋の下を通らないように、一旦、当船から背負われており、橋を通過してから再び船に乗り込む。当船が島に到着すると、シヨウロウ以外の人々は河内様一枚岩に荒潮と御神酒を撒いて拜んでから河原に着岸する。シヨウロウは背負われて社務所で狩衣に着替えてから、シヨウロウ座に座る。午前一〇時過ぎに神事が始まる。この頃までに古座の五地区のトウヤが集合している。高池下部からはオヒサシガンドと称する老女一名に男児一名、女児一名が河原に着座する。これは後に御舟が帰る時に河内様を三周する時にその方向を向いて無言で座るといふ役を持っているものである。祝詞奏上等の儀式の間も、シヨウロウはシヨウロウ座に座ったままである。シヨウロウ座は河口の方を向いており、河内様の方には向いていない。神事が終了すると獅子舞が各区の座で奉納され昼食となり、これが済むと權伝馬の競争となる。權伝馬の競争は島を右回りに二周するものである。權伝馬の競争が済むと、御船式と称して、御船が順に御舟唄とともに川を下っていく、その後ろに当舟等がつく。河口に到着すると再び神社で神事があり祭礼が終

了する。

以上が河内祭の概要である。先の二木島祭同様、御船と称する三隻の船がこの祭礼で最も目立った存在であるが、二木島祭に比べると広域の祭祀圏を持つことから、その組織がより複雑になっている。同じトウヤであっても、生業の異なりによつて御船を出さない地区の方が多い。御船を出す古座では明確なトウヤは見られず、若者組が中心になって運営されている。

しかし、よく見ると祭礼の本日にはシヨウロウと称する男児と女児の務める役があり、前日の神額と同様、橋の下を通さないという一種の聖な存在であったことを暗示している。シヨウロウそのものは、神社に前日から籠もり、本日においては当船で御船のある河内様まで行き、シヨウロウ座に座っているだけの存在であり、現行の行事の中では積極的な役割を果たしているとはいいがたい。また、高池下部から出すオヒサシガンドも老女と男児、女児という組合せでかつ特に積極的な役割を果たしているとはいいがたい。

現在では、全くその存在意義が失われているかに見えるこのような男児、女児を中心とした人々の存在は、先の二木島祭の事例を参考に再構成してみれば男児三名と女児二名、老女一名ということになり、オドリコ、サカイキハヤシ、シヨウド、ガズ、ガズトモ、ババという構成とほぼ同様の構成になることが推測できる。すなわち、現行のこれらの諸役の子供たちには、何ら積極的な意義を見いだすことはできないものの、可能性としては、二木島祭の事例と同様に模擬婚的な儀礼を持つていたことが推測できるのである。



河内祭りのショウロウ



河内祭りのオヒナシガンド

現在ではほとんど明確な意味が不明であるこれらの諸役が、御船を中心とした行事に後からの風流的な要素として付け加わった存在であるとは、現在の儀礼における積極的な意味が見いだせないだけに考えにくい。むしろ、この祭礼行事が広域化し、なお、生業的な異なりから船を出さない区まで含むようになる過程で、本来、セツトとしてあつた子供たちの役割が分散し、意味が次第に不明になったものと考えた方が自然であろう。

残念ながらこの祭礼行事に、ほとんど文献がなく歴史的な検証が行い得ないが、かつては模擬婚的な儀礼をこれらの子供たちが果たしていた可能性があることを指摘しておきたい。これら一連のいわゆる御船祭には、二木島祭に代表されるようなシヨウド、ガズ、ガズトモ、サカイキハヤシ、オドリコ等の男児や女兒のセツトが存在し、現在は明確でないものの、かつては重要な存在であつた可能性が高いことを指摘しておく。筆者がかつて調査したことがある、同様の御船祭に属する和歌山県新宮市の熊野速玉大社の御船祭には、祭祀組織の構成はより複雑であり、また、古来から続く明神大社の祭礼としての格式を誇っている。しかし、現行の行事の中で、本日に速玉大社からの渡御列の先頭にヒトツモノと称する馬上の人形すえて河原まで渡御し、河原から御船を先導する船には唐児の人形がつき、また御船が回る御船島の上には二名のガズと称する少女が立つ。この事例も現在では明確な役割を持っていない子供が存在していることに注目しておきたい。すなわち、紀伊半島南部の海岸部分にかなり広範囲に男児や女兒が儀礼に登場する祭礼行事が分布していた可能性を示しているからである。しかし、こうした事例が必ずしも紀

伊半島南部の海岸部分だけでなく、もっと広い範囲で見られるかどうかを検証するために、御船祭系統に属さない別の祭礼行事についてもみていきたい。

(三) 三重県桑名郡多度町「多度大社上げ馬神事」の場合

多度大社の上げ馬神事は、三重県の無形民俗文化財に指定されている北勢地方を代表する大規模な祭礼行事であり、近郊のみならず遠くからの見学者も呼ぶ五月の一大風物詩となっている。ここではその中でも上げ馬を出さない肱江集落の儀礼を中心に紹介する。

上げ馬神事に参加するのは、多度大社の氏子圏のうち、多度、小山、戸津、肱江、北猪飼、猪飼、力尾の七つの集落である。これらは、総称して御厨あるいは神戸と言われて、その他の氏子圏の村々と区別されている。また、北猪飼、猪飼、力尾の三集落は猪飼三郷と呼ばれ、祭礼の進行上、その他の集落と異なつた儀礼を持つ。これら七つの集落の中で肱江の集落は騎手ではなく神児を出す。神児は年齢七才から九才くらいの男児で、騎手と比べて幼少であり上げ馬をしない。以下に肱江集落の現在の行事を中心に簡単に述べておく。

四月二九日 見世馬 馬方から本番に使う馬をこの日だけ借りてきて、村人に馬を見せる。集会所で略式ながらも馬の装束を整えて、普段着の神児を乗せて村中を歩く。後で男児の希望者も順番に乗せる。

五月三日 須賀柵造り・馬迎え・内祭・見世馬 肱江集落の氏神である須賀神社横の馬場に、各戸一人ずつ（炊事当番を除く）が出て馬場に綱を張り柵を作る。馬場の両側には杭を打って、綱を巻きつけて馬がそれて走らないようにする。両端の部分は竹を横に通して、その上から

薦を吊り下げて向う側が見えないようにする。また、馬場の両端、須賀神社入口、神児の仮厩、村の入口、会所の入口、村の中等に真竹を道を挟むよう建て、その間にしめ縄を張る。神児の仮厩は会所の敷地内につてあり、この会所の一角に神児の精進潔斎する部屋が作られる。部屋といつても、会所の一角をしめ縄で仕切ったもので、ここに畳を敷いて祭の期間中は神児以外誰も入ることができない。

一方、船着神社の方には、宮係の人々が五日の祭礼の準備として神輿台を組み立てて、清掃等を行い、一对の神社の幟を立てる。神児の乗る馬は、この日の早朝、青年会が馬方宅に借りに行く。この時、必ず酒一升と塩を持参して、馬方宅で御馳走をよばれ、その後馬方とともに肱江の会所に向かう。このしめ縄のある所で馬方と青年会の人々が垢離を



多度大社上げ馬神事の神児

とつて会所に入る。各場所での準備作業は、ほぼ昼頃に終了し、それぞれ会所に集まる。会所では炊事係が昼食の準備終了後に役員が太鼓を叩いて村中に知らせる。子供たちは、各自、茶碗と箸を風呂敷に包んで持参して会所で食事をする。また、先述の準備作業を行っていた大人たちも炊事係の用意した料理を肴に酒を飲む。馬が到着するのが、通例、この宴のたけなわの頃である。馬が到着すると、青年会が馬の装束を整える。鞍、泥障皮、鐙、鞆などをつけて神児が乗れるようにする。神児は黒紋付きで馬にまたがり、朱傘を後ろから差しかける。馬に神児が乗っている間中、この朱傘が差しかけられている。最初に神児が村の中央の道を一往復し、その後、その年以降、神児になりたい子供を乗せる。最後に再び神児が乗つて一往復して終了する。この後、青年会は、肱江川堤防にて馬に乗つて走らせ、肱江川の中で馬を洗い会所に戻る。

午後三時頃に力尾にある稚児の宮（稚児三昧とも言う。）に神児と村役人及び青年会、猪飼三郷の騎手、村役員等が集まり、神事が行われる。

五月四日 試楽・御祓い・神児貰いの儀 上げ馬神事行事全体としてはこの日が試楽の日であり、翌日の本日とほぼ同様に上げ馬が行われる。しかし、肱江集落は神児も出番がなく、午前中は村の人々は多度大社社に行つて、他の村の上げ馬神事を見物する。一方、炊事係はこの日の夕方から行われる神児貰いの儀の御馳走の準備を行う。四日の試楽の後、須賀の馬場への乗り込みの行事が、騎手を出す肱江以外の御厨が行うことになる。これが終わると、小山を先頭に猪飼三郷（猪飼・北猪飼・力尾）の騎手と馬、青年会が肱江の旧県道を通つてそれぞれの村に帰る。この時に肱江の青年会はバケツに塩水を汲み、笹を手を持って待

っている。騎手と口つきの者には、笹の葉で塩水をかけて清め、後ろの青年会の者には、用水から汲んだ水をバケツでかける。これは垢離をとる代わりであり、四御厨では垢離をとる必要がないとされる。この行事を垢離という。垢離が終了すると、肱江の会所では太鼓が叩かれて、御祓が行われる。会所では、神児とその親、馬方、村人一同が会して、多度大社の神官が御祓いをする。神児、馬、厩、村人の順である。この後「神児貰いの儀」となる。「神児貰いの儀」は、猪飼三郷の代表者（当番の御厨総代）と神児、肱江の総代の間で盃を交わし、翌日の本日に各御厨によることを約束する儀礼であると言われる。この盃は、先ず毒見として肱江の区長が飲み、順次、当番の御厨総代と神児の盃に移る。この時の盃は三々九度であり盃事の時に肱江の村役人が必ず「お肴ここに」と言いながら、重箱の肴を箸でつまみ上げて見せることが行われる。盃事が一通り終了すると、一同酒宴に入る。神児、総代、神官、馬方には御馳走が出され、十分に飲んでもらう。村人たちも末席で互いに酒を交わす。飲むほどに伊勢音頭等の歌が出て賑やかになる。九時頃になると、貰いに来た御厨総代を送る。会所を出るときに、御厨総代に脛巾（ハバキ）の酒として新品の一升瓶の封を切り、なみなみと注いで二杯飲んでもらってから出発する。この時、肱江の青年会、村人、馬方一同が養老線の踏切まで見送る。ここで再び酒を飲み、最後に踏切をはさんで挨拶をして別れる。一方、村人は会所で貰い方を送るまで酒を飲み、その後、三々五々家に帰る。神児は、この日、会所の一角にしつらえられた精進部屋で親と一緒に寝ることになる。

五月五日 本日 この日の早朝五時頃、朝祭が多度大社で行われるた

め、神児は青年会の幹部や親と一緒に神社に行く。神社では各御厨の騎手や弓取りも集まり神事が行われる。この時の神児は顔を白く塗って、額を頬に一センチほどの丸型を紅で描く。また、唇にも紅をさす。祭典の終了後、稚児の宮に猪飼三郷の騎手などと参り、会所に帰って朝食をとる。朝の祭典に参加しない青年会の人々は、馬の準備をしておく。馬の準備が整うと出発となる。この時、神児は再度化粧や装束を整えることになる。出発に際して、神児と肱江の総代の間で水盃が交わされる。この時、神児は馬に乗った状態で、一方の総代は会所の中での水盃となる。神児は馬に乗る時には、青年が肩に担ぎ、決して自分の足で地面を踏まないようにする。その後、神児は騎乗した状態で会所の庭を三回半回って出発する。肱江の神児の行列は、警固六人を先頭に、御幣、神児（騎馬で朱傘が側に着く）、毛槍四本、薙刀三本、先箱補助の者、青年会、総代、神児親、祭典取締役、村の子供たちとなる。この行列の進路は、肱江川の左岸を上流に歩き、神児貰いの儀に関係する各御厨に向かう。小山に入ると、小山の騎手等のいる会所の方に警固全員が輪になって持っている笹を下から上へ上げて、「オー」と大きな声で囃す。この合図は二回行われ、一回目は準備、二回目が出発の合図となり、小山の騎手が出発する。神児の一行は、その猪飼三郷の騎手の待つ会所に向かう。各々の村では、神児のためのしめ縄が張っており、その地点まで進むと、相手の村方に神児と馬を任す。神児の行列の参加者には酒が振る舞われる。神児は馬とともにその村の会所に入り騎手、弓取りと盃を交わす。この時、双方の御厨の総代と神児の親も参加する。

こうして各御厨を回った神児は馬に乗って行列の先頭となり、その後



多度大社上げ馬神事の神児と騎手

にその年の猪飼三郷の順に騎手と弓取りの行列がついて多度大社に向かう。ほぼ午前一〇時頃である。神児は大門橋を渡り馬場に入る。神児が坂下の楠の下までくると、朱傘をすぼめ、これを合図に猪飼三郷の騎手が三頭続けて勢いよく駆け出す。これを「神児の乗込」あるいは「猪飼三郷の乗込」という。これが終わると、神児は青年に担がれて神社に向かう、馬も別に引かれて境内に入り、神児は馬に乗って境内中央で神官により御祓を受ける。この後、七度半の行事まで休息となり、神児、村人がともに昼食をとる。七度半の行事が始まる前には、再び神児は馬に乗り、朝と同様の行列に並び馬場の中に入る。七度半の行事は、上坂の真下から六御厨の警固に護られた神官が神児の前まで来て持った金幣と扇で低頭して一回招く。これに応じて神児は少し前進し、七回繰り返して、神児は先の楠の北に達すると素早く御殿に上がり、乗った馬は楠の北側を東に引き入れて朱傘をすぼめる。この朱がさを合図に上げ坂が始まる。

上げ坂の行事から楠木回りの行事までは、神児は御殿でこれを見物する。楠木回りの行事が済むと、再び神児が馬に乗って神輿の行列が始まる。この時も神児が先頭を歩き、これに神宝、神輿、騎手が続く。神輿は三基あり、それぞれ小山、戸津と多度、猪飼と北猪飼と力尾によって担がれる。御旅所への途中、騎手は弦打ちの行事を行う。行列の一行は、小山尾津神社前を通り、須賀の御旅所へ向かい、その中央付近に神児や神輿が進むと、各御厨の騎手が乗った六騎の馬による追い抜きがある。こうして騎手は神児や神輿より以前に船着神社にて待ち、入ってくる自分の御厨の神輿に対して花笠を取って拝礼する。神社の境内では、神輿

が並べられ、東から神児、騎手、弓取が並んで祭典が行われる。北方に神輿が到着すると、六御厨からミゴク（神饌）が供えられ、神官による礼がある。その後、そのお下がり分け合せて食べる。騎手は桑の木の箸で一口食べて、その残りは他の者が貰う。この後、小山の「神的」、流鏑馬の行事が行われ、各御厨の騎手は神輿とともに多度大社に戻るが、神児はそのまま肱江に戻る。翌六日は、礼参りに神児は騎手、弓取と多度大社に行く。

上述のように、肱江集落の上げ馬神事に果たす役割は、特別なものがある。すなわち、他の集落（御厨）が騎手及び弓取りという実際に上げ馬をする役割の青年を出すのに対して、肱江の場合は、神児と呼ばれる少年を出し、実際の上げ馬は行わないし、特に四日の試乗行事にも基本的に関与しない。しかし、一方では上げ馬神事の全体の構成の中では欠くことのできない存在となっているからである。特に猪飼三郷（猪飼、北猪飼、力尾）と呼ばれる集落との関係が深いことは、先に述べた儀礼の概要のとおりである。

ここで、興味深いのは「上げ馬神事」の名称で代表されるように、騎手や弓取による上げ坂の行事が、この祭礼での主要な行事であると一般的に考えられているにもかかわらず、肱江の神児の存在が行事全体の構成の中で、決して軽くない点にある。

肱江集落の神児とその他の集落の出す騎手や弓取りの役割の最大の違いは、上げ坂行事をするかしないかという点にある。儀礼的に細部の異なりはあるにしても上げ坂行事をする集落では、自ずから騎手や弓取りの年齢は一定の範囲で決まってくる。すなわち、実際に騎乗できる程度

の年齢であることが要求され、実際のこの行事全体の実行者である青年会の年齢層に含まれることとなっている。これはこの行事の執行上、合理的である。上げ馬神事自身、非常に危険なものであり、単に馬に乗る騎手や弓取りだけでなく、馬の準備から実際に馬が坂にかかった時にこれを引き上げる役割を担う人々まで一体になって行う必要がある、これらの役割を含めて同じ社会集団（年齢集団）に属しているということは何かにつけて有利であると考えられるからである。

これに比べて、肱江の神児の場合は、騎手や弓取の年齢よりもずっと若く、六才から九才くらいの少年の役割となっている。神児の役割から考えて、騎乗するのは儀礼的のものであり、上げ坂行事のような危険なものではないから、その点で同じ年齢集団に属する者である必要性は乏しい。しかし、肱江全体の行事は、基本的に他の集落と同じく青年会を中心としており、その意味では、神児も同じ年齢集団の中で通過儀礼としての性格を持っていた方がより自然ではないだろうか。やや逆説的になるが、肱江の神児を務める年齢層が他の集落の騎手や弓取りよりも年少であるということは、この役が児童の役でなければならぬという儀礼的な必要性から生じたものであることを示している。

この儀礼的な必要性は、現行の行事の中にも看取することができる。上げ馬行事の中で神児が果たす役割は、主に五日に集中されており、その役割は特に猪飼三郷と呼ばれる地域の各集落の騎手・弓取りの出發を即すことにあり、肱江の神児がその年の順にこれらの集落を回って、杯事後、肱江の行列の後ろをこれらの集落の騎手や弓取りの行列が行くという構成になっている。また、その他の地域の集落に行くことはない

が、実際の上げ馬行事開始の合図である七度半の使いを受けることになっており、上げ馬神事全体に果たす役割は大きいと言わねばならない。つまり、肱江の場合は、現行の行事から考えても、他の集落のように、本来、騎手や弓取りを出したのではなくて、現在と同様に神児を出していたと考えられるのではないか。

次に、この神児の行粧について注意したい。神児を務める者は、五日の出発時に特殊な化粧を施す。すなわち、顔を白く塗り、両頬と額に直径一センチ程度の円形に紅をさすことになっている。いわゆる稚児の場合も化粧を行うというのが一般的であるが、この神児の化粧は非常に特徴的である。これと類似した化粧は民俗事例としていくつか報告されている。島根県美保関美保神社の青柴垣神事の「小忌人」、福井県三方町多由比神社の祭礼の「ミコリカキ」、大阪市杭全神社の御田行事の「太郎坊人形」などいくつかの事例がある。これらの事例に共通するのは、基本的に宮座のトウヤ儀礼における女兒の役割であることが上げられる。杭全神社の「太郎坊人形」の場合、名称からして男児をさすと考えられるが、赤い着物を着るなど、本来的には女兒をイメージした可能性も高い。

そこで、肱江の神児の関与する儀礼を見てみると、祭礼の本日の前日に「神児もらいの儀」という行事があることに気がつく。この儀礼の詳細は前に述べたとおりであるが、注目したいことは、この儀礼に「三々九度の盃事」が見られることである。言うまでもなく、一般的に「三々九度の盃事」は婚姻儀礼の中心であり、また、「お肴ここに」という発声も、この地域一般の婚姻の際に行われていることであり、明らかにこの儀礼が、この地域の婚姻の儀礼と共通していることを示しており、神児

が婚姻における花嫁としての儀礼的役割を本来持っていたことを示している。これは先述の御船祭におけるシヨウド・ガズといった模擬婚姻儀礼を中心とした児童の存在と同じというわけではないが、神児の「神児もらいの儀」が本来、婚姻を模した儀礼であったと考えられるからである。

まとめと今後の展望

はじめにのところで述べたように、祭礼行事において模擬婚姻を伴うという事例は特異ではあるが、必ずしも地域的に偏っているわけではない。そして、改めて御船祭系の祭礼行事につきものの、二木島祭に典型的に登場するシヨウド、ガズといった男児・女兒の存在は、これらの男児・女兒が扮装の上では婚姻儀礼特有の衣装を身につけることから、本来、これらの男児・女兒が模擬婚姻儀礼を行っていた可能性を暗示している。また、多度大社の上げ馬神事に登場する神児も、「神児もらい」の儀においては、北勢地方から名古屋地方にかけて、一般的な婚姻の際に行われる儀礼を含むものであり、これも本来模擬婚姻の儀礼を持つていた可能性を暗示している。特に今回の調査の過程で、紀伊半島南部には御船祭りに代表される海岸部だけでなく、山間部にかけて広範囲にシヨウド・ガズと称する男児・女兒が登場する祭礼行事があることが判明した。また、中世的な宮座の形態を色濃く残す若狭地方の宮座にも、ゴヘイモチやゴクカキと称する男児・女兒が登場するトウヤ儀礼が数多く報告されている。今後、これらの諸事例の詳細な調査研究を通じて更に模擬婚姻儀礼の持つ意義についてより深い考察をすることができよう。な

お、この研究は平成一三年度に(財)東海冠婚葬祭産業振興センターの学術
研究助成金を得て実施したものの一部であることを申し添える。